
何気なき日常こそかなし

柚乃 詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何気なき日常こそかなし

【Nコード】

N0057V

【作者名】

柚乃 詩音

【あらすじ】

部員三人という少人数形成の古典部。部長の西村桔梗、副部長の松尾權、二人の唯一の後輩の内田心和。この三人とその他の人たちの何気ない日常が一番愛しいんだなあと感じる小説。時折日常でそんなことはありません！ということになりうるかもしれませんが、そこは嗚呼やっぱ日常が愛しいと思うことでスルー。毎回何がしかの和歌が出てきます。

あかねさす（前書き）

思いつきから始まりつい書きたくなって始めました。
連作っぽく。

一話一話のかかわりは殆んどない予定です。

あかねさす

「あかねさす 紫野行むらたけき 標野行しめのき

野守のもりは見ずや 君が袖ふる」

「部長、それ誰の歌です？」

部室に行くとき既に部長であり、俺の幼馴染である西村桔梗が静かに和歌を読んでいた。窓の外を眺めながらも夏になるということにも関わらず長い黒髪を風に揺らしている。

桔梗はこれといって特徴のない平凡な容姿をしている。たぶん俺が幼馴染じゃなくて、初対面の人間だったらちよっと誰かに話しかけられて意識がそれたら忘れてしまうような。

でも、桔梗の声は綺麗だ。優しくて周りを落ち着かせる独特の雰囲気がある。きっとその穏やかな性格ゆえのものだろう。

質問を投げかけたのは俺達二人の唯一の後輩、内田心和だ。

こちらは明るく天真爛漫な性格で小さな身長とこまごまとした動きがハムスターか何かの小動物を連想させられる。セミロングの髪を三つ編に結んでいてしゃべるたびにぴよぴよこと揺れる。桔梗曰く抱きしめたくなるほど可愛い子、らしい。

彼女とはついさっき部室の前で会って一緒に入って来た。俺達の所属しているのは古典部。部員三名の小さな部だが割と楽しくやっていると思う。活動内容は古典に関わることに全般。琵琶や琴を弾いたり、お茶を飲んだり、かるたをしたりと何でもありな感もある。

かぬたのおおきみ
「額田王よ。万葉集卷一―20」

桔梗は視線を外に向けたまま澄んだ良く通る声で告げる。

「ふわあ、桔梗先輩よく覚えてますね。こういう歌ですか？」

「天智天皇が蒲生野で狩りをしたときかつての夫である大海人皇子に呼びかけた歌よ。ああ、そんなに手を振っていたらば人に見られてしまいますよ。って感じかな。かなり意識だけれどね」

「素敵ですね」

結構有名な恋の歌だ。そして俺の記憶が正しければ確か結構有名な――

「ドロッドロの三角関係の話だな」

「それでもっ。素敵じゃないですか。切ない感じで！」

ようやく桔梗は視線を部室に戻し微笑んだ。

「この歌に大海人皇子は

紫草の むらさき にほへる妹を いも 憎あらば

人妻ゆゑに われ恋ひねやも

と答えているのよ」

「うーんと、紫草のように美しい貴女が憎いのならばどうしてこれほどにも恋焦がれましようか……って感じですか？ まだ好きなんだから仕方ないだろうって事ですね！ 切ないー」

「いや、昼ドラ級にドロドロしてんじゃんかよ」

「松尾先輩には分かんないだけですよ」

桔梗は微笑ましそうにこちらを眺めている。腐れ縁の幼馴染が後輩と絡んでるのがそんなに面白いのか？

「恋する気持ちは古今東西万国共通よね。今日は万葉集についてでもやる？」

「別にいいけどさ……寝てもいい？ あんまし興味ないし」

「せっかく……せっかく桔梗先輩が話してくれるのにー」

叫ぶ心和无視して俺はすでに机に伏せている。

「いいじゃない。たまには二人で喋りましょう」

「うゝ……そうですね。恋の歌でも詠んでガールズトークです」

机に顔を押し付けながらも、寝ることはなく二人の会話を聞いていた。

（なんで女って恋愛事がそんなに好きかなあ）

二人は本棚に会った資料を開いて楽しそうに話している。特に心과는恋バナの類が好きらしくテンションが高い。

「この歌とかとっても素敵じゃないですか？」

「ああ、それ？ いいわよね。可愛いわよねえ。どんなに昔でも恋

する女の子は皆可愛いわあ」

「先輩、喋り方が年齢にあってませんよ」

楽しそうな女子二人の笑い声。俺はこの手の会話は苦手だ。告白されることは少なくないと思うし、今まで付き合った子も何人かいる。でも、そういう風に向けられる感情は俺にとってはしばしば邪魔になる。

「先輩って好きな人いますか？」

思わず耳を澄ませた。今まで桔梗の色恋沙汰を聞いたことは一度もない。それゆえの興味だったのだが桔梗の答えはあまりにらしいものだった。

「私？ 残念ながらいないわね、そういえば」

「そういえばって先輩それでいいんですか……」

「いいんじゃないかしら？ 部活していて楽しいし、青春は謳歌していると思うわよ？ それより、心和ちゃんはいないのかしら、気になる殿方は」

桔梗は時々現代で使うには奇妙な単語を混ぜる。それは聞きなれないとかなのり違和感を覚えるものだが古典部員の二人はすでに慣れている。でも唐突にそういった単語が来るとやはり笑いがこみ上げてくるもので、堪えようとしたものの小さく吹き出してしまった。

「あたしは……秘密です」

「そう。うまくいくといいわね」

桔梗は心和の反応で大方予想がついたようで既に「いる」ということで話を続ける。

「桔梗先輩、あたしいるなんて言ってますんよう。秘密、です！」

「それはいるって言っているのと同義よ。……權、そろそろ部活も終わりにしましょう。狸寝入りはおしまい」

桔梗は出していた万葉集の訳や情景の写真などがついた丁寧な本を本棚にしまいながら言う。

「気付いてたのかよ……」

「え？ 起きてたんですかあ！？ あたし結構恥ずかしいこと言っ

てませんでしたあ？」

「あー、言ってた言ってた。恋愛論を熱く交わしてた」
でもさっきの秘密です発言が一番恥ずかしいと思う、とは流石に
言わないでおこう。

「いやあ」

くだらない掛け合いに心和の悲鳴で区切りがついたところで桔梗
が解散を告げて鞆を持つ。

「心和ちゃん、可愛いんだから攫われたりしないようにね。飴上げ
るって言われてもついて言っちゃ駄目よ」

「わかってますよ。そんなに子供じゃありません！」

「じゃあ帰りましょうか」

当たり前のように桔梗は俺にそう言う。だから当たり前のように
俺も答える。

「そうだな」

幼馴染という位置づけもまた、俺にとっては女子たちの恋情と同
等に邪魔なものだ。

十十十

「權、寝たふりするくらいなら部屋の隅で本でも読んでいたらいい
じゃない。そのほうが自然よ。それに暇でしょう」

「いや、俺が寝てると思ったほうが心和が気にせずに話せるだろ」
「結果的には逆に恥ずかしい思いさせちゃってるけれどね」

それは言うな、という意味を込めて桔梗を睨んでみるも見事に無
視された。

「あ、ちよっと本屋さんによってもいい？ 見たい新書があるの」
「いいけど」

俺と桔梗は幼馴染だ。小さな頃から何かにつけて親が一緒に行動

させたがったせいかな今でもこうして一緒に登下校したり、休みの日にたがいの家を訪ねることもある。

桔梗が熱心に本を見ている隣で近くにある本を眺めて時間をつぶす。

「あ！ 松尾君だあ」

女子数名の声がした。名前を知っている辺り同じ学校の生徒だろう。そちらを見るとやはりそうだ。俺の通う桜坂高校の制服を着ている。だが、その顔に見覚えはまったくない。にこにこ手を振っているが、こんなこと慣れっこだ。相手にする気はないのでまた本を眺め始める。

「やーん、つれないー」

「なに読んでるのお」

懲りることなく声を掛けてくるが俺はまったく取り合わない。それに気付いた桔梗が面白そうに肘でわざとらしくこちらを小突いてくる。

「もてるわねえ、松・尾・君。手でも振ってあげたらどう？」

「めんどい」

からかう以外のリアクションはないのか、こいつは。

少しはなれたところでこちらに声を掛けてきている女子たちには俺と桔梗が仲良く話しているように見えたらしい。「誰あれ？」などという声がちらほら聞こえる。本当に桔梗は知名度が低いな。いつも俺の隣にいる割には空気のように見事なまでに気付かれない。

「うーん、誰だっけえ」

「あ！ あれじゃない。古典部部长！」

「ああ、松尾君の幼馴染って言う」

今日は割と速く気づかれたようだ。桔梗は教室ではずっと本ばかり読んでるからな。もう少しコミュニケーションを取ろうとすればいいのに。人当たりのいい性格をしているのに友人が少ないのもまた疑問だ。

「よくわかったねえ。あたし全然見覚えないや」

「松尾櫂ファンクラブ会員？16ですから」

「16って微妙な数じゃね？」

なるほど。俺の交友関係は筒抜けなのか。別に隠すことでもないから問題はないが、なんか怖いな。

「相も変わらず人気ものねえ、櫂は」

「桔梗は相変わらず存在を知られてないな」

「それでいいんじゃないかしら」

皮肉の意味にも取れる言葉だったが普通に受け流す。これは桔梗だからこそなせる業だと思う。他の女共に言ったらば文句を浴びる羽目になる。そういうところは一緒にいて楽でいい。

「本、探してたのあった？」

「うーん、見つからないんだよね」

ふとさっき手に取った本にもう一度目を向ける。これ、じゃないのか？ 桔梗が探してる本って。確かこの作家好きだったよな。

「これだったりする？」

「え？ ……ああ！ それ、それだよ！」

嬉しそうに俺が持っていた本を勢いよく取り上げて胸に抱く。こういうときの表情は子供っぽいな。

「ありがとう。買ってくるね」

「ああ」

パタパタと小走りで走っていく桔梗を見て思う。遅……。桔梗は文系科目が異常なほどに得意な分、その反動なのかなんなのか運動は極端に苦手だ。何もない所で転ぶこともしばしば。目を離すといなくなっている（転んでいるのに気付かずに置いてきている）。

だけど、それなのに古典が関わりと別人だ。日舞は華麗に、完璧にこなす。競技かるたをやらせれば大抵の奴には負けない。前に一度蹴鞠などもやってみたことがあるがすばらしいセンスを見せてくれた。

「あれか。すきこそ物の上手なれってやつ」

もしくは自分の趣味に対する執念だな。

「お待たせ。いきましようか」

桔梗はさっきまでの興奮ぶりは消えていつもの落ち着いた雰囲気に戻っている。切り替え早っ。

二人で桔梗が買った本のことを話しながら家路へと着く。

ん。まあ、これが俺と桔梗と愉快かもしれないその他多勢の日常だな。うん。

あかねさす（後書き）

あかねさすは私の大好きな歌です。

權の言うとおり三角関係の歌ですけど。

これからは主に百人一首の歌が多いと思いますがこの歌は特別だったりします。

わびぬれば

「あら、またいるわ」

ある日の放課後のこと。私こと古典部部長の西村桔梗は日直のため、に部活にはまだ行かずに校舎内を歩いていた。

私が見かけたのはサッカー部を熱い視線で見つめる3組の美月ちゃんだった。美月ちゃんはサッカー部のゴールキーパーの悠君と最近付き合いだしたという。

美月ちゃんは小柄だがしっかり物で存在感のある子だ。そして思いやりがあつてよく気が付く子だと桔梗は見ていた。

悠君もまた背はあまり高いほうではない。その体格でもレギュラーを守っている努力家タイプだ。表情の変化が大きいムードメーカー的役割も担っているように見える。

「本当に悠君のことが好きなのね。何に対しても真面目なのに恋愛にも一生懸命で。素敵じゃない!」

ぎゅうっ、と持っていた日誌の抱きしめる。内心「恋愛っていいわねえ」「美月ちゃん可愛いー」などと大騒ぎしているが表向きはあくまでも変然と、いつもどおり特に目立つこともない落ち着いた様子だ。

そろそろ先生のところへ行かないと怒られてしまう。職員室へ向かおうとしたときだ。さっきまで熱心に部活を見ていた美月ちゃんがぱたりと斜め前に倒れこんでしまった。

「!?! 大丈夫? 美月ちゃん!」

慌てて窓から外に出て駆け寄る。よかった。今いたのが一階で。

もし二階だったらかなりの高さから降りなければいけなかった。無理なことでもないのだろうけれど非常に目立つのは確かだ。私はあまり目立つのが好きではない。慎ましかに、目立たず平凡に、が一番だ。それが一番周りを眺めていても不自然がないから。つまり周囲を観察するのに目立つことは大敵なのだ。

近くまで行ってそつと美月ちゃんを抱き起こす。意識が飛んでい
るみたいだ。呼吸が少し荒い。熱はなさそうだ。

でもこの状況……どうしよう？ 流石におぶって保健室まで行く
のには遠い。誰か先生を呼んできてくれないかと期待して辺りを見
回すものの皆部活中。心配そうにこっちを見たりもするが私がいる
ことできつと「一緒にいるあの女子生徒がどうにかする」と思っ
ているのだろう。どうにもならないんですよ！ 誰か助けて！。

「……桔梗？ 何してるんだ」

聞きなれた声がして勢いよく振り返る。

「權！ 丁度いいわ。美月ちゃんが突然倒れちゃって。保健室まで
とは言わないわ。ここからなら部室が近いし、そこまで運ぶの手
伝ってくれない？」

權は状況がよく読めないという表情をしていたが協力してくれた。
部室まで運ぶと時々かるたなどをするときしか使わない畳を心和
ちゃんと敷いてそこへ美月ちゃんを寝かせた。

「よしつと。……あ！ 忘れてたわ。日誌を置いてこなくちゃ。心
和ちゃん、美月ちゃんのことをよろしくね。ちよつと行ってくるわ
權、ありがとうね」

「はいっ！ 了解しましたあ」

「別に気にするほどのことじゃねーよ」

十十十

戻ってくると丁度美月ちゃんが意識を戻した所だった。

「あら、起きたのね」

「桔梗先輩。今起きた所ですよ」

美月ちゃんは自分が何故ここにいてここがどこだか分からないよ
うだ。きよろきよろとしながら小さく声を出す。

「あの……ここって？ 私どうしてここに？」

「驚いたかしら？ ここは古典部部室よ。美月ちゃんがここにいる理由は倒れちゃったから。櫂に運んでもらったの。勝手にごめんなさいね」

謝ったのは知らないうちに男子に運ばれたって事についてだ。女の子だったらお姫様抱っこみたいなのは一度は夢見るものかもしれないが知らない男子に気を失っているうちにやられるのは嫌だろう。それに美月ちゃんは列記とした彼氏持ちだ。

「ご迷惑掛けてしまったみたいで……ありがとうございます。で、あの……なんで私の名前……」

それを聞いて櫂と心和ちゃんはまたか、というような表情をする。私はそれを敢えて気にせずに答える。

「おなじ学年だからなんだけど……私の事は知らないみたいね」

「まあ、桔梗は空気と同じレベルの存在感だからな」

「松尾先輩失礼ですよ。桔梗先輩はこんなにも可憐で可愛らしく慈愛に満ちていて心優しく誰にでも手を差し伸べる素敵な方でしかも自ら目立つことはしない慎ましきそして気付かれないものの確かな成績と運動神経何をやっても平均以上は出しそれでいて琴や琵琶まで弾きこなすという教養の深さ……」

心和ちゃんはほっといたらいつまでも話していそうなのでこうなったらば取り合わないに限る。少し悪いと思うんだけどね。私のことを慕ってくれているのは確かだし。ちよつと過剰な所があるって言うか、一步間違うと病んだ人になっちゃいそうなのが困りものだけれど。今の台詞ノーブレスとか凄すぎるわよ。まだ喋ってるし……。それに私は慎ましいのではなくて目立ちたくないだけなんだけどなあ。

「す、すみません」

心和ちゃんに気圧されて心底申し訳なさそうに謝る美月ちゃん。なんか……可愛いわねえ！ 私可愛いものは大好きよ！ それは人間でも男でも女でも動物でもものでもね。まあ、古典の次ぐらいに

だけれど。

「気にしないでいいのよ。それよりも、倒れたことに心当たりはある？ 私の見解だけれども、風邪とかじゃなくて疲労か寝不足だと思うんだけど」

「あ、それならきつと……」

「うん？」

美月ちゃんの話はいたってシンプルだった。

悠君と付き合えて取っても嬉しかった美月ちゃん。彼が活躍するのが嬉しくて一生懸命サポートしていたらしい。そこははたから見たとおりだった様子。でも、なににでも一生懸命で手の抜けない美月ちゃんは無理がたたって今日のようなけっかになったようだ。平たく言えば彼が大好きで尽くしていたけど頑張り過ぎちゃったということだろう。

「うーん……」

わびぬれば 今はたおなじ 難波なる
みをつくしても あはむとぞ思ふ

かしら？」

しまった！ 部活中と同じノリで歌を詠んでしまったあ。美月ちゃんぽかんとしているわ！ そりゃあそうよね。突然どうしたの！？ って感じよね。ううう。

「あーごめん。桔梗、いつもこんな感じなんだ。気にしないでやって。何かにつけて和歌につなげるもんだからさ。そんだけ古典が好きだって事で。部長としてはいいことなんだろうし」

「あっ！ 珍しく松尾先輩がちゃんとフォロー入れてます！ しかもまともなやつ！」

「おまつ、内田！ 俺に対する内田の印象ってかなり悪くないか！？」

「気のせいです！」

心和ちゃんは間髪いれずに、というか櫂の一通り喋り終わる前に切って捨てた。一応櫂は先輩なんだよ？ 心和ちゃん。

「とりあえず、ごめんなさいね。突然詠いだしちゃって」

「いいえ、大丈夫です。少し驚いたけど……あの、さっきのどういう意味なんですか？」

よかった！ 引いてない。絶対に引かれたと思ったのに、櫂今度ばかりはありがとうね。むしろ興味を示してくれてるし。

「あのね！ 恋の歌で百人一首にも載っている歌なんだけれども、意味は……そうねえ。身を滅ぼしても意中の相手に会おうとする心境を謡ったものよ。この歌は失恋の歌だけれども心のそこから相手が好きで相手のために身を尽くすのは美月ちゃんと一緒なんじゃないかな？」

「そう、ですかね？」

恥ずかしそうにへへっと笑う美月ちゃん。んー。可愛いっ！

「相手を思うことは素敵で大事なことよ？ でもね、それで体調を崩しちゃったら元も子もないわ。何より彼に心配掛けちゃうもの。

この歌とは違って身を尽くして報われるのには程々にするのも大事じゃないかしら」

「そう……ですよ。私、ちょっと無理しすぎていたかもしれない。桔梗ちゃんと話せてよかった」

その言葉がとても嬉しくて自然と笑顔がこぼれた。

「あ、そろそろ最終下校ですね。帰らなきゃ。じゃあ、よかったらまたおしゃべりしようね、桔梗ちゃん」

「もちろん」

パタパタと軽い足取りで美月ちゃんが立ち去ったあと、心和ちゃんが嬉しそうに騒いでいた。

「やっと、やっと！ 桔梗先輩のすばらしさが理解できる人に出会えた気がします」

それをあきれた表情で見る櫂。いつも通りの風景。今日も平和ね、古典部は。

「桔梗ちゃんってなんかくすぐったい呼び方ね」

「なんか言ったか？ 桔梗」

「どうかしましたか？ 桔梗先輩」

親しみのこもった二通りの私を呼ぶ声を聞きながら小さく呟いた。

わびぬれば（後書き）

今回の歌は元良親王（もとよししんのう）のもので、

美月ちゃんとは相手のために尽くすという点だけしか共通点がない歌だったりします。

意味は

いどおりにいかなくなってしまったのだから、今となっては同じことだ。難波にある航行の目印、みおつくし滯標ではないが、身を尽くしても逢おうと思う。

ですかね。これは元良親王が不倫が発覚し追い詰められた状況で謡われたもので付き合いたての初々しくって幸せな美月ちゃんとは縁遠い歌です。

なんでちよつと無理矢理感が会ったかなあとは思いますがまあそこらへんはご愛嬌ということでお許しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0057v/>

何気なき日常こそかなし

2011年7月22日03時34分発行